「マイホーム」

見れば胸の中央から吹き出るように、服に水滴のシミが散って模様になっている、薄いベージュのワンピースだから目立つ、子どもたちの食べこぼしかよだれだろう、無地の服ならやっぱり、黒以外は着ちゃいけないんだと思いながら彼女は、昼の光を吸い込むガラスのドアを、体の重さで押し開け中に入った。

荒川さんですか、私の旧姓と一緒、と名札を見て彼女が呟くと、目の前の荒川は、なるほどですね、と笑顔で返事した、そのまま彼女の書いた記入用紙に目を落とし、今は芝川さまなんですね、違う川になったんだ、と独り言みたいに言う、お子さんがお二人なんですね、と聞くので、彼女は頷く。

双子で一歳半なんです、寝返りしたら、歩いたら、離乳食が一日三回食になったら、自我が芽生えたら大変だよってそれぞれ脅されてきたけど本当にいつも、言われた通りに大変、と答えると、なるほどですね、と荒川はまた言い、本題なのですが弊社が、初めて来られたハウスメーカーなんですね、と確認した。

そう、住宅展示場とかも行かなきゃとは思ってるんですけど、こちらの会社は建てる土地に近いしインスタの写真がすてきだったから、土地はもう夫の親、義父が買ってくれてるんです、義父の家の裏がちょうど売りに出てたからってこの浜の方に、と彼女が答えると、奥さま、この今いる事務所の横に、弊社の建てた宿泊体験していただけるお家があるんですが、と荒川は声を大きくした。

弊社の家の実際の使用感、サイズ感などチェックしていただくためなんですけど、リビングの窓はこれくらいの大きさがいいな、とかは暮らしの中でしか分かりませんから、冷蔵庫と電子レンジなどは備え付けであるんですが、まあビジネスホテルに泊まる、くらいに考えていただければ、以前は最低限の寝具はお貸ししていたんですがこのご時世で、と荒川は自分のマスクを指差す。

ガスも通っているので、材料など持ってきていただければ料理も作れます、流し台の高さとかもご検討いただけるので、調理してみるのはおすすめですね、家のとなりが事務所なので安心です、と荒川は説明した、寝袋やタオルの布類は持参でお願いいたします、と寝袋のチャックを首もとまで上げるジェスチャーをした。

鞄を下ろしながら、ありがとう、家のこと私に決めさせてくれて、その体験の家に次の土曜日泊まってくると彼女が言うと、仕方ないよな、場所はまあ俺のいいようにさせてもらってるし、家なんて帰ってまたどっか行くだけだからと夫は答えた、でもお前一人で宿泊？もっと他に、上手いやり方ないの、と夫は言い、気まぐれに子どもを抱き上げるのだった。

上手いやり方、たとえば？お義母さんも腰が悪いから、この子たちを預かってはくれないでしょ、うちの親は遠いしと小さな声で彼女が言えば、目も合わせないまま、もっとみんなが、楽できるようなさ、と腕の中の子どもをぐらぐら揺らした、そんなにしないで、揺さぶられっ子症候群になっちゃう、と彼女は夫から引き離して抱き寄せた。

はいはい、と夫は手持ちぶさたになった腕をほぐすように揺らす、一晩、ちゃんとできる？と彼女が聞くと、お前ができるんだからできるでしょ、と夫は笑ってあっちに行った、鞄の中の雑多なレシートなど、整理しようと思って見ると、この前産婦人科でもらったエコー写真が指に当たる、彼女はその白黒の、テラテラして薄いのを眺める。

バウムクーヘンを半分に切ったような形の、白い内部が写っていて、波紋のような模様はびっしりと子宮の中の肉だろうか、それとも空間でもあるんだろうか、そんなに見たことないけど天体の、星の動きを何時間もかけて撮った写真みたいだと彼女は思った、二人がお腹にいる時はこの中に黒い海みたいなのができて、丸が二つ浮かんでいた、今は何もない。

産婦人科は、生理痛とはまた違う痛みで、おりものもだらっと出て不安だったので行った、待合室で子どもたちを押さえながらすごく待った、検査したけど異常も妊娠もなかった、きれいな子宮ですと言われ、ありがとうございますと彼女は答えた、この子た

ちの出産は大変だった、立ち会い出産でもなかったから夫は知らないだろう、沖縄の蟹みたいに、車で轢(ひ)かれるかもしれない道路を、産卵のために大移動するっていうなら努力も見えやすくていいのに。

テレビの方を見ればその前に、虫のように子ども二人が集まっている、番組ではコーヒーチェーン店の比較をしている、スタバの女神の顔は左右対称ではないらしい、何でも最初は私としよう、スタバもドトールも私と行こう、と二人の脚を両手でさすりながら彼女は言う。

ぜひスマートキーで開けてみてください、となぜか声を潜めて荒川は言い、彼女に車のキーじみたのを差し出す、これを鞄にでもポケットにでも入れておくと、ドアのボタンにタッチするだけで鍵が開きます、便利ですよね、お子さんいらっしゃると、両手塞がっちゃいますもんねと言い、オプションの料金にはなってしまうんですけど、と続けた。

家の中をあらかた説明し、ここからの景色が最高です、と住んでても開けないであろう高い位置にある小窓を指差してから、明日の朝、そうですね、十時くらいには横の事務所にいるようにしますので、私に直接鍵を返してください、とそれだけ強い口調で言って荒川は家を出た。

荷物をどこに置こうと考えて、布類が詰まった大きなリュックを、一階のクローゼットに押し込む、家をひと回りする、どの窪みも、家具や家電がもっと置かれるのを待っている、今頃あの子たちは昼寝から起きて、野菜スナックと私が剝いておいたりんごを食べているだろう、夜は用意してあるクリームシチューとロールパンを、明日の朝は冷凍庫の炊き込みご飯のおにぎりと冷蔵庫のかぼちゃの味噌汁を食べる。

鍵と携帯、財布をポケットに入れて、彼女は外を歩いて回ることにする、駅とは反対の浜の方に向かえば公園は、南の島みたいな木でいっぱい、大きな用水路は海に直接流れていく、手に何も持っていないことに慣れず、私は一人で歩く時は、両腕をどう振っ

ていたんだっけと思った、子どもたちはどう?と夫にＬＩＮＥすると、オッケー、と返事が来た。

この前の一歳半健診は、公民館の広間に子どもたちが集まって、あの子たちはそんなに多くの子どもを一度に見たことはないから、二人とも最初から泣きわめいた、歯科健診のブースでは彼女が羽交い締めにした、積み木を積む検査をする余裕もなく、暴れる二つの体を両腕で必死に落とさないようにしていた、そんなに泣いてるのは、あの子たちだけだった。

彼女はそれを思い出して微笑む、次はたぶん三歳児健診だから、きっと少しはマシになっているだろう、健診が終わって、希望したから別の個室で保健師との面談があった、言葉の出は遅いかもしれないです、と彼女が不安を言うと保健師は、相談できる機関はたくさんあります、療育なども行ってみてもいいかもしれませんねと言った、どこでできますか、と彼女が聞くと資料の束を漁ってから、インターネットで調べてみてくださいと答えた。

いつもならこの時間は、昼寝から順々に起きたあの子たちをベビーカーに乗せ、公園かスーパーにでも行っている、安く買った二人乗りベビーカーは車輪の滑りが悪く、ずっと腕に力を込めていなければ進まない、縦に長いからどちらか片方に傾いていってしまう、友だちの、一人用のベビーカーを押させてもらった時は軽くて驚いた、日傘を差す余裕もこれならある、と思った。

腕は、風を触るように、軽く振るようにした、工事中の開けた区画があるので近づくとオレンジ色ののぼりが立ち並び、新しい街・全66区画分譲中、と書いてある、完成した家から売っていっているらしい、まだ半分くらいしか建っていなくて、建設中の覆いの中からバチバチと釘を打つ音が響く、新しい街、と呟きながら見回す、今はまだ低い草が生えていて、パイプが何本ものたうっている。

まだ空は広いから丸い、海の鳥の声が聞こえる、奥にいけば住宅展示場のように家が並び、でももう人がたくさん住んでいる、同じ会社が作っているから似た家が建って、

一軒売れ残っているのだって、他のと何ら変わりない、日当たりのせいだけで売れないのか、と彼女は思った、人の家は見ていて心楽しかった、改善点はいくらでもある気がした。

大きな道路に面した看板には、無電柱の街・デビュー、と書いてあり、それは羨ましかった、木々が好きなだけ青く、でも秩序を保って生えている、傾斜を見つけて水が流れる、彼女はスーパーに寄り、夕飯と朝食の買い出しをする、一人分の食事の材料をカゴに詰めていく、今日は道幅の狭い通路も通れる、普段は行かないようなワインの売り場までじっくり見る。

夕飯の準備をしているとチャイムが鳴り、インターフォンの画面を見れば荒川が映っている、モニターの横の解錠ボタンで、玄関に来なくても鍵が開けられます、と大写しの顔が嬉しそうに言った、リビングまで入ってくると、一応どなたの時も来させていただいてます、何か不都合ないですか？と両手を広げた。

早く帰ってほしかったけれど彼女は気を遣って、じゃあ、メジャーで長さを測るの手伝ってもらえますか、と頼んだ、そうですね、何センチなら、体感で言うとこれくらい、というのを押さえておくのは大事ですからね、あとはコンセントの場所など考えていただけたらと思います、もっとコンセントをつければ良かったというご意見はよくお聞きしますので、クローゼットの奥にもちゃんとつけて、ルンバの基地にするとか、最近は多いですね。

この端からでいいでしょうか、と荒川はメジャーの始まりの部分を壁に合わせた、何箇所かをそうしてペアで測って回った、お子さんは双子ちゃんなんですよね、性別は？と荒川が聞くので、男と女、と彼女は言う、へえ、それはちょうどいいですね、と荒川は笑顔を返す、彼女は熱心に携帯のメモ機能に、長さを書き込んでいる途中なので、そうなの、ちょうどいい、と適当に答える。

計算すると、この八畳の部屋でもクローゼットがある分狭くなって、テレビ台とダブルベッド、シングルベッド一つずつしか置けないみたい、あの子たちがもう少し大きく

なれば、夫も一緒に四人で寝るだろうから、もう一つシングルを置きたい、それなら九畳は必要なのか、でも二人が巣立ってしまえば、九畳の部屋なんてどう使えばいいのだろう、趣味の部屋か、と彼女は途方に暮れる。

何となく二人で台所に行きつき、まな板に鶏のモモ肉をのせていてそのままだった、あっ、ちゃんと調理してみていただいてるんですね、と荒川は言い、どうですか、このキッチンの台の高さは、と続ける、そうですね、と彼女は包丁を持ち直し、切る体勢になってみる、もっと高くても低くてもいい気がした、体は曲げて合わせられた。

奥さま、背が少しお高いですもんね、ご主人さまはどうですか、と荒川は尋ねる、台所は、分からないから任せるって言うと思います、でも洗面所だってベランダだってそうだと思うけどと笑うと、それはあるな、家は奥さまの城だもんなと荒川も笑った、独り言のトーンで言えば、敬語を使わなくていいと思っているんだろう、と彼女は思った。

他にすることもないので、包丁でモモ肉を撫でながら、鶏肉のスジって下ごしらえで取らなきゃいけないっていうけど、どこまで取ったらいいか分からないですよね、と彼女は言う、どの程度切ったら終わりでいいんだろう、っていつも思いながら抜いてる、目立つ白いのってこれ血管なのかな、全部取ったら肉がバラバラにほどけちゃうんじゃないかな。

なるほどですね、と荒川は答え、まあスジがね、お家みたいなものですね、血管ですから、繋げて成長させるんですよね、家族を、とそのまま無理やり家の話に持っていく、でも暗いキッチンだったらスジもよく見えないですよ、うちの台所がそうなんですけど、暗いからまな板にのせてても何か死んだ肉と向き合ってる感がありますもん、でもこう、弊社のキッチンは明るいですから大丈夫です、天板も丈夫で、と念押しして、荒川は帰っていった。

白いスジは引っ張るとそのままどんどん肉の下を進み、途中で切れたりした、フライパンで皮の面からじっくり焼き、プチトマトも横で焼いて、潰してトマトソースにしてパンも添えた、となりに子どもがいるわけでもないのに、彼女はすばやく食べ終えた、

風呂に入れば浴槽は細長く、この大きさならあの子たちも、並んで座れるかもしれないと思った。

今の家の風呂は狭いから、三人で入ると子どもは立っているしかないのだ、これくらいとこれくらい、と両手で撫でているかのように子どもたちの肩幅を形作ってみるが、この大きさで正しいかは分からなかった、着替えて、夜になった部屋はまた違うのかなと思い、一部屋ずつ確認していく、大きい窓、でもこんな大きさがあっても、後でみんなカーテンで塞いじゃうよね、と彼女は呟いた。

どんな形でも仕様でも、もう用意されていればどうにでもやっていける気がした、だから建て売りで買う人も多いのか、となりの家の壁の色がすごく重要だ、窓から見えるのが眩しいオレンジ色の壁だったら、日の出みたいに明るいんだろう、でも建てる土地はもう決まっていて私は関係ない、横の人も選べない、と彼女は思った。

畳の部屋に寝袋を真っすぐに置き、夜泣きの声もないので、続けて朝まで眠った、夫はいつも私たち三人とは離れた別室で寝ているから、昨日の晩はうるさくて驚いただろう、もし子どもたち二人だけ別に寝かせて、自分は違う部屋で寝ていたりしたら許さない、と彼女は思った、窓は全て磨りガラスなので、カーテンがなくてもやっていける、その四角の向こうにぼんやりと、となりの家の窓が映るのを眺める。

彼女は懐かしく思い出す、昔おじいちゃんを図書館で見かけて、でも話しかけずに後ろを通ってそのまま帰った、おじいちゃんは本日返ってきた本の棚を、腰に手を添え眺めていた、声をかければ良かったと悔やんではいないのに、死んでから思い出すのは棚の前の横顔ばかり、茶色いツイードのジャケットばかり、その太い腕と腕を組んでどこへでも行った、すごく優しくしてくれた。

ここに子どもがいてもいなくても、果たして同じ自分だろうかと彼女は思う、あの子たちのことは愛してる、目が合えば手足を動かし笑ってくれる、蓄光してぼんやり光るおしゃぶりを咥(くわ)えて寝るから暗くても二人、どこにいるのかちゃんと分かる、よだれが

水っぽいにおいの子と、もう片方は息がコーンの缶詰みたいなにおい、でもそんなにおいは、きっといつかしなくなる。

買っておいたパンをレンジで温めて食べ、缶コーヒーをゆっくりと飲み、歯を磨く、自分の唾は人のより粘度が高い気がする、小学校の給食の後、手洗い場でうがいをしていたら、お前唾糸引いてるじゃんと男子に言われた、確かに細長く垂れていて、他のみんなはそんなことなかった、だから彼女はもう、人が見ているところでは口をゆすがない。

掃除して回る、風呂場の扉を開け、シャワーの水で壁の上の方から毛などを流す、大きく見えた作り付けの棚だけど、あまり物を置ける場所がない、シャワーのホースを大きく動かすと当たってしまうだろうから、私のシャンプー、トリートメントやクレンジングジェル、泡で出てくる洗顔料を置けばいっぱいになってしまうだろうと彼女は思った。

荷造りと戸締りを終え、彼女は事務所の扉を開ける、荒川が待ち構えている、お疲れでしょうから、お帰りになってからこのアンケート用紙にまたご記入ください、とびっしり二枚書かなければならない紙を差し出す、おまけなのか、重たい食器用洗剤もくれる、また考えます、と彼女が言うと、それはもう、一生のお城ですからと荒川は答えた。

もう一度外観をじっくり見てみましょう、と荒川に促され外に出て、彼女の目は家の外壁を見つめる、いかがでしたか、黒っぽいのが、今人気ですよね、と荒川は説明を始める、遠く向こうには山が見えるので、彼女はぼんやりと、昔登った富士山を頭に浮かべる、でも八合目くらいで泊まってサークルのみんなと雑魚寝した、あの二段ベッドまでしかもう思い出せなかった。

陽は不思議なほど、照ったり陰ったりをくり返している、昨日はクリームシチューだったから、今日は和食にした方がいいと思う、お米を食べることは大事らしい、と思いながら彼女は自分の豊かな胸もとを眺める、服を脱げば産前よりホクロが多くなってしまった、子どもと入るようになって、風呂場にはもうT字カミソリも置けなくなった。

このハウスメーカーの標語なのか知らないが、一生のお城ですから、という言葉がまた横でくり返されるのを聞き、その一生のっていうのやめてください、と彼女は強く声を出す、すみません芝川さま、と反射的に謝って、お城、がダメでしたかね、とまだ若い荒川が呟く、私も荒川だったんだけど、大きな川だったんだけど、道の傍の用水路から、子どものゲップによく似た音が聞こえ続ける。

荒川さん、やっぱり、こちらのハウスメーカーで家を建てるの、やめようと思います、と彼女が言う、なるほどですね、と答えながら荒川は焦ったような顔をしている、ノルマとかがあるのだろう、芝川さま、どうしてそう思われたのでしょう、ご意見お聞かせねがえますか、と言い、荒川はメモを取る姿勢になる、仕事用のノートだ、私は辞めたからもうそんな物はないのだと彼女は思った。

あそこ、一人で住んでるイメージしか浮かばないんです、何していても、と彼女は答える、荒川は笑顔になる、お一人で泊まられたのが快適だったんですね、よくあります、お子さん預けてご夫婦で宿泊体験される方も多いじゃないですか、ここに二人で住めたらなあ、なんてね、翌朝よく言われます。

そうかな、と彼女は言い、そうかもしれない、と荒川を正面から見つめて笑うようにした、別にここで分かってもらう必要もないんだった、私がどんなに、昔一人でいられたかを、好きな場所に物を置けた、自覚していなかったけれどそれは確かに自由だったことを、荒川はメモに一応、一人、と書き込み下線を引いている。

でもそんなのは、どこのハウスメーカーさんでも同じなんじゃないかな、とまた独り言の調子で荒川は言い、浜だから地震の時怖いと思われました？でも地震なんてどこで起きても怖いですからね、と続けた、彼女は時計を見る、もう好きなアニメも終わる時間、あの子たちはちゃんと今笑ってるかな、と懐かしく思い出す。

話し続ける荒川に視線を戻し、そうですね、家は白い血管、とりあえず繋いで守ってくれる、と彼女は呟き鍵を荒川の足もとに置いて返す、それに背を向け離れていく、またお電話差し上げますので、という声が後ろから聞こえる、大きなヤシの木の下に入り

込むと、したたるように伸びる葉が彼女を包み込むよう、浜の公園には南の島のような木がたくさん生えている、彼女は両腕を交互に振って、まずそちらへ向かう。

（井戸川射子著『この世の喜びよ』２０２２年、講談社　所収）